

B-145 法衣の構成研究 (第6報) - 韓国の法衣について -
筑紫女学園短大 ○保刈禎子
延世大 学校 都 在 恩

目的 前報に於て韓国製法について報告したので、引続き今回は製法の下に着用する法衣について述べ、佛教衣が国家、民族、気候、凡土により如何に変化したか、又如何なる型で伝承されるものであるかを考察するものである。

方法 1977年以來4回にわたり訪韓し 延世大 学校 都 在 恩氏と共に寺院 法衣製作者、比丘比丘尼より聴取り調査 現物調査を行ない、又現地で購入した資料により縫製構成方法を調べた。

結果 韓国法衣は 下着に民族服である Tu-lu-ma-gi (周衣) と Ba-ji (袴) を着用し その上に Jang-sam (長衫) を着る。

長衫の構成は 褌衫と裙子が連結して長衫となり、中國及び日本で直綴と呼ばれているものと同型である。日本の曹洞宗の直綴と韓国の曹溪宗の長衫を比較検討した。

色彩は長衫、下着類 脚衣まですべて灰色を用い、比丘、比丘尼の区別もなく、又僧の階級差もない。材質は遺品には木綿、麻、絹の使用が認められるが、第二次大戦後はすべて化学繊維を使用する様になった。

韓国法衣は中國唐代に始められた直綴の型を長衫として残り 下着、色彩、材質を国情に応じて変化させたものである。